

平成26年度 文教産業委員会行政視察報告書

1. 視察期間

平成26年11月10日（月）

2. 視察先

大野郡白川村



3. 視察項目

白川郷学園の小中一貫教育について

4. 視察の目的

我が国における急速な少子化は、次代を担う子どもたちの健やかな成長にとって望ましい環境を整えることなど、多くの課題を抱えている。特に、公教育の場においては、多様な児童・生徒が学習集団として存在し、日々の学習活動や友だちとのかかわりの中で、お互いを磨き合いながら成長していくことが求められている。

文部科学省は、今年6月3日の閣議後の会見で、公立の「小中一貫校」を設置できる制度を導入する方向で検討に入ったことを明らかにしている。実現すれば、現行の義務教育の課程を小学校6年間、中学校3年間の「6・3制」だけではなく、「5・4」、「4・3・2」など、地域の実情に応じて弾力的に編成することが可能になり、一部の自治体が特例的に導入している小中一貫校を新たな学校種として認め、制度化で普及拡大を狙うとみられる。

そこで、現在、小中一貫教育に取り組んでいる、大野郡白川村の白川郷学園で視察研修を行った。

5. 視察内容

ア. 概要

○小中一貫教育（一貫校のタイプ）

基本的には、同一敷地内での併設型と既存の校舎を利用した連携型がある。

- ・施設一体型校舎
- ・施設分離型校舎
- ・施設隣接型校舎
- ・施設一体型と施設分離型が併存



○白川郷学園の概要

- ・児童生徒数（平成26年度）
 - 小学校：96名 8クラス（特別支援2）
 - 中学校：61名 4クラス（特別支援1）
- ・小中統合と校舎の建設

平瀬小学校と白川小学校の統合に至る経緯は、もともと平瀬小学校は複式の小規模校であったことと、白川小学校の児童数の減少により統合が図られた。

そうした経緯から、まず小中一貫教育による「白川郷学園」として平成23年

に発足した。発足にあたっては、白川中学校の敷地内に小学校校舎を新築し、中学校校舎については大規模改修を行い、渡り廊下で両者を継ぐ構造とした。

その後、地域とのかかわりをより重視する見地から、平成25年に学校運営協議会制度に伴うコミュニティスクールとして位置づけられた。

○白川郷学園小中一貫教育の取り組み

(1) 9年間の学びの連続性を大切にする教育

- ・ 共通の教育目標、共通の指導理念により発達段階に応じた指導
(但し、小学校、中学校の教育課程はこれまでどおり)

(2) 教員の兼務辞令による小中の交流と連携

- ・ 小学校の先生が中学校へ、中学校の先生が小学校へ行き授業を行う
(但し、双方が相手校の担任を行うことはできない)

(3) 教科教室の活用

- ・ 中学校にはホームルームの他に教科教室が準備されている
(国語科教室、英語科教室、社会科教室、数学科教室)
- ・ 理科室(中学校校舎)、音楽室(小学校校舎)、家庭科室・技術室(中学校校舎)
- ・ 小学校高学年と中学生は各教科教室へ移動して授業を行う
(資料提示など教科独自の学習環境での学習)
- ・ 図書館は小学校校舎に設置して共用。村民図書館の位置づけで村民も利用

(4) 小学校での教科担任制導入

- ・ 中学校の教員も参加して小学校の専門性を有する教科を指導
- ・ 小学校高学年の理科と社会は教科担任制
- ・ 小学校の国語、算数、外国語は担任が授業し、かつ中学校教科担任が補佐
- ・ 音楽は小学3年から中学3年まで中学の教科担任が担当
- ・ 中学の美術と技術は小学校の専門職員が担当

(5) きめ細やかな指導

- ・ 中学校の数学は数学専門の教科担任の他に2人の教員が加わり、3人での指導体制により、習熟度別指導体制を実施
- ・ 小学校高学年の算数と外国語は担任に加え中学校の教科担任が加わり授業

(6) 白川村の一貫教育の3つの特色

- ① どの子にも確かな学力をはぐくむ教育
- ② 地域に根差した故郷学習を推進する学校
- ③ 英語学習を充実し国際理解力をはぐくむ学校

イ. 効果と課題

○コミュニティスクールと白川郷学園

コミュニティスクールとは、学校運営協議会が設置された学校のことをいうが、平成16年に改正された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」に基づき設置されている。平成17年に17校で始まったコミュニティスクールは、平成26年には、全国各地で1,919校にまで増加している。

白川郷学園は平成25年10月1日、白川村教育委員会より学校運営協議会を設置する学校として指定され、小中一貫校として発足したのが平成23年度であるため、その間の問題意識がコミュニティスクールへの指定へと発展したものと見える。

○小中一貫教育実践の中で見えてきた成果と課題

- [成果]
- ・「確かな学力の定着」について、一貫教育の推進は有効である
 - ・「ふるさと学習」「英語学習」を9年間一貫して取り組むことができる
 - ・一貫教育は、教員の資質向上、授業力向上の場として大変有効である

- [課題]
- ・学校と地域の繋がりがやや薄くなったように感じる

*地域の抱える課題

- ・これからの地域力低下が心配される
- こうしたことが学校と地域の改題として浮かび上がった段階で、
- ・学校は地域の力を取り入れ地域とともに子供を育てていきたい
 - ・地域は学校とのつながりを深め今以上に地域を活性化したい
- とし、
- ・各地区の力を結集して一つの大きな力としていきたい
- という思いが地域と学校で確認され、そうした機運により「学校運営協議会（コミュニティスクール）」の立ち上げに向かった。

[その後の経過]

- ・学校運営協議会設立準備委員会の立ち上げ
 - 「どんな白川っ子になってほしいか」を熟議
 - 夢・誇り・自信をもった自立した白川っ子
 - 思いやりにあふれあいさつができる白川っ子
 - ふるさと白川郷を愛し村を大切にする白川っ子
- ・教職員、準備委員合同で「コミュニティスクール」について学ぶ会を開催
 - 「地域とともにある学校づくり」という演題で、文部科学省初等中等教育局参事官：奈良 哲氏の講演による研修を実施
 - ★地域の力や意見が加われば、学校（教職員）が変わる！
 - ★学校が変われば、子どもたちが変わる！
 - ★子どもたちが変われば、地域が変わる！

これらの教育の姿を実現してくれる仕組み（道具）がコミュニティスクールということを確認した。
- ・学校が地域連携するために必要なこと
 - 地域と学校をつなげるためには何が必要か。そのための準備委員と学校職員との交流会などを通じて必要な事項を煮詰めていき、そのうえで必要な会則や組織を整えた。

こうした経緯を経て設立された学校運営協議会であるが、まずは、学校に多くの地域の方が来られる環境づくりからはじめ、学校と家庭・地域が将来の担い手となる子供たちを「ともにはぐくむ」努力をされているところである。

◆白川郷学園コミュニティの組織



○高山市における児童生徒数の現状と小中一貫教育並びにコミュニティスクール

高山市学校別児童生徒数及び学級数（平成26年5月1日）

【小学校】

学校名	全児童数	(特別支援)	全学級数	(特別支援)
東	505	17	20	3
西	180	4	9	3
南	392	6	14	2
北	713	7	23	2
山王	546	10	20	2
江名子	267	5	13	2
新宮	455	9	17	2
三枝	150	8	8	2
岩滝	20	1	4	1
花里	306	7	15	3
丹生川	273	7	13	3
清見	145	4	8	2
荘川	63	2	8	2
宮	138	7	8	2
久々野	181	5	9	2
朝日	81	0	6	0
国府	455	18	18	4
本郷	82	0	6	0
栃尾	65	1	7	1

白川小	96		8	2
-----	----	--	---	---

【中学校】

学校名	全生徒数	(特別支援)	全学級数	(特別支援)
日枝	600	12	20	3
松倉	521	14	18	3
中山	507	9	17	3
東山	394	15	15	3
丹生川	155	4	8	2
清見	73	0	3	0
荘川	40	0	3	0
宮	87	3	5	2
久々野	105	3	6	2
朝日	53	0	3	0
国府	261	5	11	2
北陵	97	0	4	0

白川中	61		4	1
-----	----	--	---	---

高山市で白川郷学園より少ないか、同程度の児童生徒数の学校

- ・ 小学校：岩滝小（20人）、荘川小（63人）、朝日小（81人）、
本郷小（82人）、栃尾小（65人）
- ・ 中学校：荘川中（40人）、朝日中（53人）、清見中（73人）

ここでは、単純に児童生徒数から市内の学校と白川郷学園を比較してみた。

小学校では、市内で複式の授業を実施しているところは岩滝小のみで、児童数は平成26年5月1日現在で20人。続いて荘川小63人、栃尾小65人、朝日小81人、本郷小82人となっている。また、中学校では、荘川中40人、朝日中53人、清見中73人、宮中87人となっている。

小中連携で見ると

白川小	96	荘川小	63	朝日小	81
白川中	61	荘川中	40	朝日中	53

という状況となっている。

平成17年の市町村合併前後から小中学校については、特に支所地域で統廃合が進み、現在のような配置となっている。旧上宝地域を除き1地域1小学校、1中学校となっている。

高山地域では、4中学校区と10小学校区が残り、小学校の児童数の偏在とその解消が問題となっている。特に、北小学校と西小学校、三枝小学校の児童数については、隣接する通学区域の問題も含め、何らかの対応をとらざるを得ないところまで来ているのではないだろうか。

また、高山地域では、中学校区と連携する小学校区の問題もあり、学校間の連携ばかりでなく、社会教育や地域活動の面を含めて複雑に入り組んでいる。

こうしたことを考えた時、支所地域、高山地域を含め、小中一貫教育やコミュニティスクールといった新しい仕組みや考え方で問題解決を図る必要があると考える。

6. 考察

文教産業委員会では、去る8月には京丹後市の学校再配置計画と小中一貫教育について視察してきた。京丹後市の事例は施設分離型の小中一貫教育であるが、白川郷学園は施設統合型の小中一貫教育として取り組み、また、コミュニティスクールとしての位置づけによる改革も伴い、学校運営協議会による様々な協力と基本方針等の協議で、地域と学校の結びつきを強めている。

施設統合型という点では、小中教員の相互乗り入れ等により、小学校高学年からの教科別指導が実現している。その意味では教科の系統性がアップしており、一貫した指導体制が実現している。また、中学校ではホームルームの他に、教科別教室が充実しており、生徒たちもいきいきとして授業に取り組んでいた。

そうした意味では、教員の相互乗り入れと教科別教室の活用で、大規模校に負けない教育環境を整えているといっても過言ではないと思う。また、学習指導体制の面でも、一貫教育の利点をどう生かせるのかの研究が推進されていると伺える。

生徒の視点に立った教育の実現という意味で、また、地域との連携を深める学校の使命といった点でうらやましい環境であると実感した。

白川村の事例は、学校施設整備が先行しての改革といった面もあり、小規模自治体の小規模校だから実現できるといった面があるのかもしれない。それでもこれからの人口

減少化社会の中では、こういった取り組みの成果を波及させていくことが必要なのだと感じた。

先にあげた荘川・朝日地域などは、白川郷学園の成功例を見れば地域との共同といった意味でも、小中一貫教育への統合と学校運営協議会の立ち上げを研究する必要があると考える。

高山地域の問題については、学区の再編をもう一度考える時に来ていると考える。中心市街地の空洞化が言われて久しいが、そうした中であっても街の中心部に小学校を残すということは大切なことであり、それを是正するには街の中から整えて周辺部へその考えを広げ、適正規模の学校を整えていくことも必要と考える。

しかし、今までにもそのような指摘があったにもかかわらず、一向にそのような改革が進まないままで推移している。国の方針も6・3制にこだわらない義務教育学園といった考えが示されるようになった。また、学校運営協議会制度も認められるようになった現在では、これらの問題解決に新しい制度の導入も視野に入れ、対応を検討する時期に来ていると確信している。

現場にある制約条件を解消して、プラスに転じる改革の視点が必要なことを改めて認識するとともに、白川郷学園が実現できている教育の取り組みが、高山市の教育の中でどう取り込めるのかの視点で今後の調査につなげていきたいと思う。